503

本城（もとじょう）遺跡

（西之表市西之表字本城）

位置と環境

遺跡は，西之表市街地の北方に位置し，台地のすその，海辺からの吹き上げによって形成された砂丘の小丘陵上の一角にある。

調査の経緯

縄文時代の曽畑式土器が出土する遺跡であることは早くより知られており，昭和34年に西之表に市制が施行された記念事業の一つとして発掘調査を計画した。調査は，昭和34年３月と35年３月の２回にわたって実施され，これは西之表市における初めての発掘調査である。

遺構と遺物

表層直下から現代陶片・薬きょう・鉄片や青磁小片，須恵器小片，黒色研磨土器，一湊式土器，市来式土器等の小片が混在し，出土した。石器は，磨製石斧，打製石斧，石皿，小形の棒状の敲石，黒曜石の欠片なども出土している。

曽畑式土器は，本遺跡から出土する土器の主体をなすもので，第２層下位から大きな破片が多量に出土した。口縁部が外反するものがほとんどで，胴部が少しふくらみ，丸底のものが多い。文様は器面全体に施されるのが普通で，底部も蜘蛛の巣状のものがほとんどである。

特徴

南西諸島における縄文時代前期の解明にとって重要な遺跡の一つであり，南九州と同様に西日本文化の影響を受けていることが，発掘調査によって種子島で最初に確認された遺跡である。

資料の所在

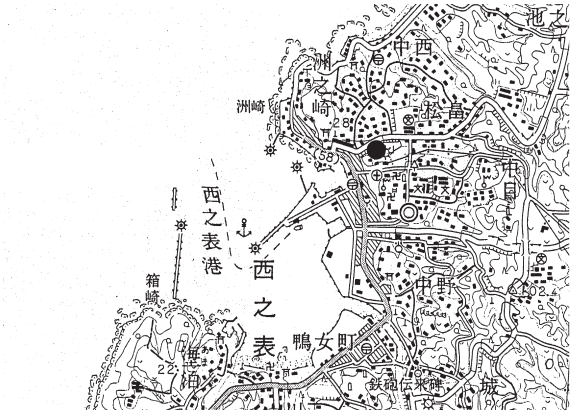
出土遺物は，種子島開発総合センターに展示・保管されている。

参考文献

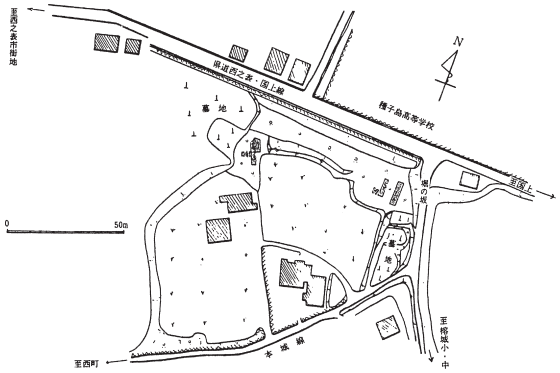
西之表市教育委員会 1973『本城・田之脇遺跡調査概報』

南種子町1987『南種子町郷土誌』

（沖田純一郎）



第１図　本城遺跡の位置



第２図　本城遺跡の範囲図

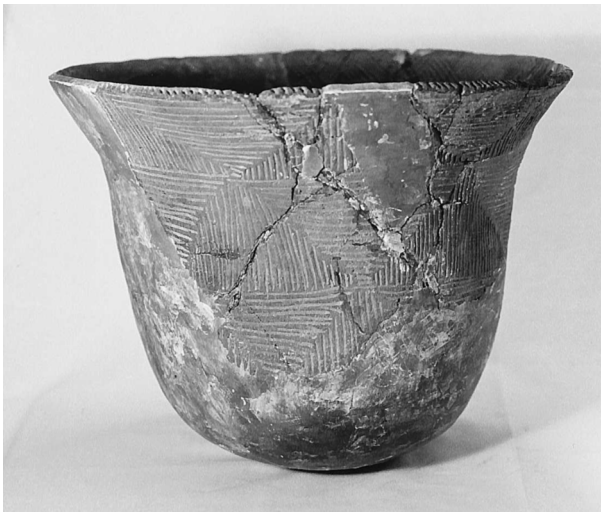
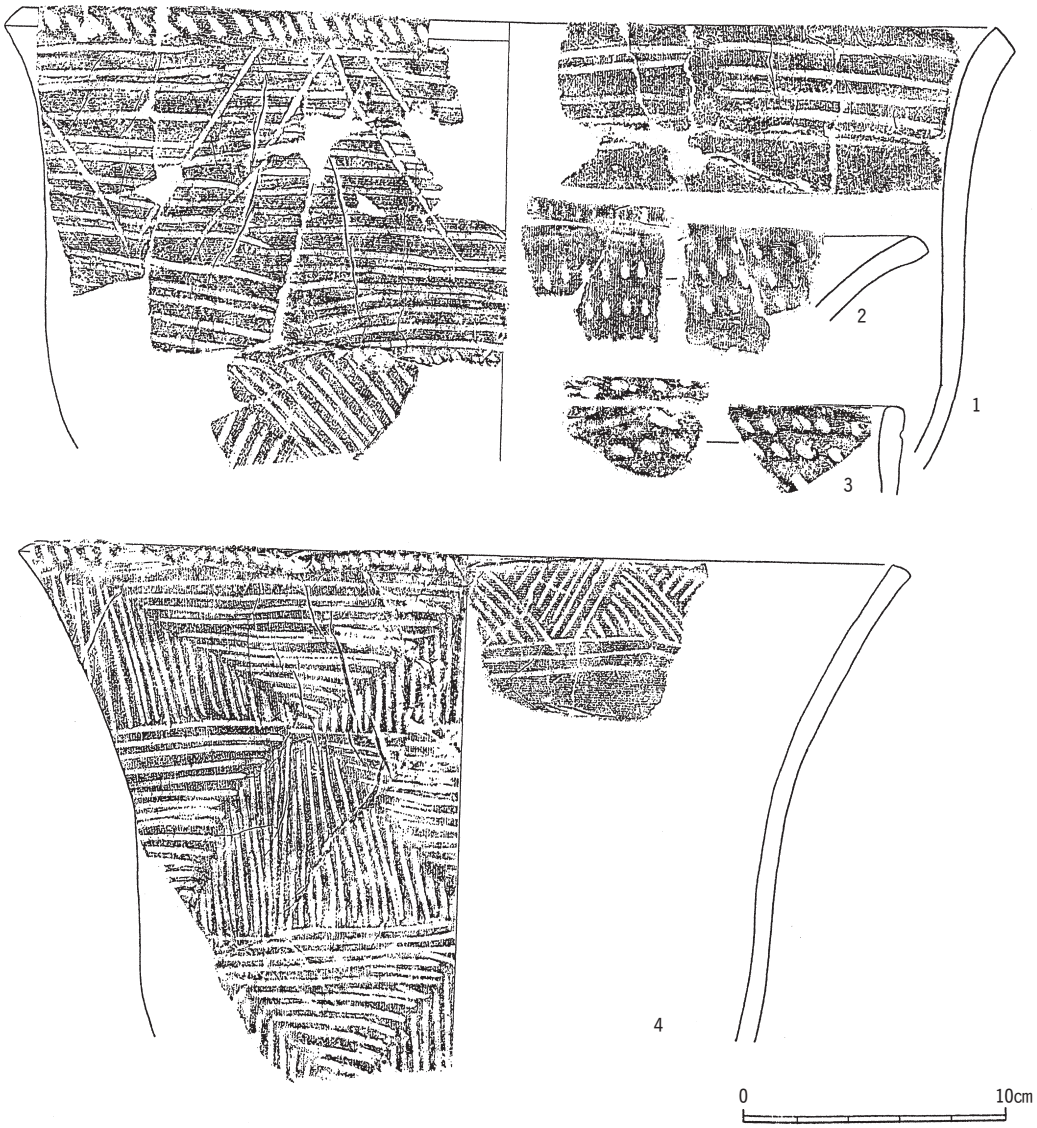


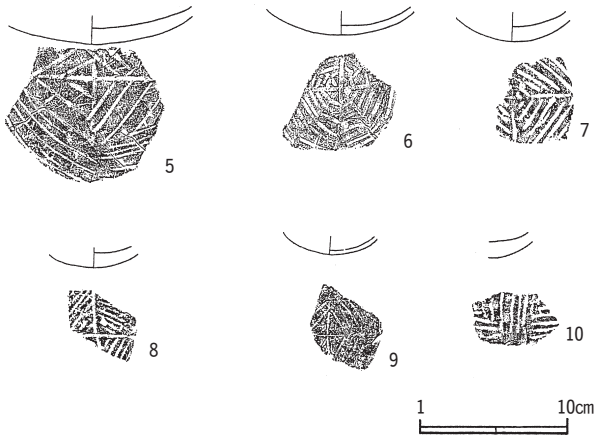
写真１　曽畑式土器

写真２　曽畑式土器片の表（左）と裏（右）



第 3 図　曽畑式土器口縁部

写真 3　底部



第 4 図　底部